

小学校通常学級に在籍する軽度発達障害児の行動面の調査

— 学年・診断からみた最も気になる・困った行動の特徴について —

Questionnaire survey on mild developmental disabilities
with behavior problem in elementally regular class

: Characteristic of most difficult behavior across a school year and a diagnosis

平澤紀子・神野幸雄（特別支援教育センター） 廣嶋 忍（特別支援教育講座）

Noriko Hirasawa & Yukio Jinno; Special Support Education Center

Sinobu Hiroshima; Division of Special Needs Education

要 旨

本報は、通常学級に在籍する軽度発達障害児への教育的支援につながる行動アセスメントを開発する研究の第一段階として、G市の全公立小学校通常学級担任696名への質問紙調査を基に、軽度発達障害児の気になる・困った行動の特徴について学年や診断から検討した。軽度発達障害が想定され、気になる・困った行動を示す414名の対象児童が抽出された。3年生が最も多く6年生は最も少なく、診断のある児童は3割であった。最も気になる・困った行動として、上位から「不適切な会話」、「取り組まない」、「かわり」等が挙げられた。低学年では「行動の遅れ」、中学年では「暴力」、高学年では「無気力」が目立った。また、診断のある児童では「取り組み」が少なく、「興奮」が多かった。以上を基に、最も気になる・困った行動の特徴について考察した。

キー・ワード：小学校通常学級、軽度発達障害児、気になる・困った行動、調査研究

Abstract

This article described characteristic of behavior problem of mild developmental disabilities in elementally regular class to develop behavioral assessment for appropriate educational support practice. According to questionnaire survey on 696 elementally regular classroom teachers in G city, 414 children with mild developmental disabilities who exhibited behavior problem were selected. There were the most third graders and the most few sixth graders. These children of 30% got a diagnosis. Most difficult behavior were inappropriate speech, trouble on participation, inappropriate interaction, and so on. A delay of an action in the lower grades, aggressive in the third and fourth grades, and arrangement and unresponsiveness in the upper grades were outstanding. There were many answer of children with diagnostic in trouble on participation while few in irritability. Based on these results, characteristic of most difficult behavior were discussed.

Key words: elementally regular class, children with mild developmental disabilities, behavior problem, questionnaire survey

I. はじめに

全国実態調査から、小・中学校の通常学級に在籍する児童生徒のうち、学習面で著しい困難を示すものは4.5%、行動面で著しい困難を示すものは2.9%、あわせて6.3%の特別な教育的支援を要する児童生徒がいることが明らかにされている（特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議，2003）。その背景には、LD、ADHD、高機能自閉症等のいわゆる軽度発達障害児の存在があり、彼らへの教育的支援の確立が求められている。

とりわけ、行動面の困難については、集団の教育活動において、対象児童だけでなく、他の児童の参加も阻害する深刻な問題である。こうした課題に対して、担任教師が問題行動の要因をどのように捉えているかを検討した調査研究（竹林・別府・宮本，2004）や、担任教師の教育的支援を支える要件を検討した実践研究（例えば、平澤・神野・池谷，2006；関戸，2004）はあるが、通常学級において具体的にどのような行動が問題とされ、どのような生起状況にあるのかは明らかにされていない。

そこで、通常学級に在籍する軽度発達障害児への教育的支援につながる行動アセスメントを開発する研究の第一段階として、本報では、小学校通常学級担任への質問紙調査を基に、軽度発達障害児の気になる・困った行動の特徴について学年や診断から検討することを目的とした。

II. 方法

1. 調査対象

G市教育委員会の調査協力を得て、市内48公立小学校の696の通常学級担任を対象とした。

2. 調査期間・調査手続き・回収率

平成17年11月、教育委員会を通じて、小学校に調査用紙を配布・回収し、47校（回収率98%）の回答を得た。

3. 対象児童

対象児童は、通常学級に在籍する軽度発達障害児で、担任教師にとって、気になる・困った行動を示す児童とし、通常学級担任と特別支援教育コーディネーター等の複数から抽出してもらった。各学級に複数在籍する場合は、最も指導困難な行動を示す3名を選んでもらった。

気になる・困った行動については、年齢や場面にそぐわない「気になる」あるいは「困る」（平澤・藤原・山根、2005）と、担任教師が捉える行動とした。軽度発達障害については、診断のある児童だけでなく、その疑いのある児童も対象とし、LD、ADHD、高機能自閉症等を想定した全国実態調査の項目と基準（特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議、2003）により、回答結果から選定した。

4. 分析項目

調査項目である学校・学級に関する7項目と対象児童に関する12項目うち、対象児童に関する6項目（①性別、②年齢・学年、③診断、④手帳、⑤最も気になる・困った行動1つ、⑥全国実態調査の項目（特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議、2003））を分析対象とした。

5. 分析方法

上記の分析項目について、最も気になる・困った行動に関する自由記述回答は、複数の研究者で整理・分類した。各項目のクロス集計した回答の偏りについては、 χ^2 検定あるいは尤度比検定（篠原、2001）を行い、有意な場合は残差分析を行った。

III. 結果

1. 対象児童について

通常学級在籍児童総数22,285名中、対象児童は646名（2.8%）で全国実態調査の結果（特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議、2003）とほぼ同じ出現率であった。各学級3名として回答された対象児童は488名であった。軽度発達障害について、全国実態調査項目の回答を分析し、学習面か行動面の著しい困難という基準に該当する474名を選定した。さらに、身体障害、聴覚障害、視覚障害等の児童と最も気になる・困った行動が学習面のみの児童を除き414名を分析対象とした。

1) 性別

対象児童の性別は、男子342名(83%)、女子72名（17%）で、男子が8割を占めた。

2) 学年

図1に、対象児童の学年を示した。3年生が92名（22%）と最も多く、6年生は最も少なかった。

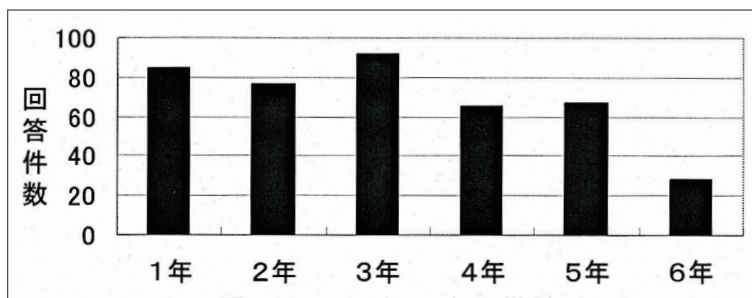


図1 対象児童414名の学年

3) 診断

対象児童414名のうち、診断のある児童は118名(29%)で、診断のない児童は221名(53%)、診断の不明な児童は75名(18%)であった。図2に、診断のある対象児童118名の診断を示した。

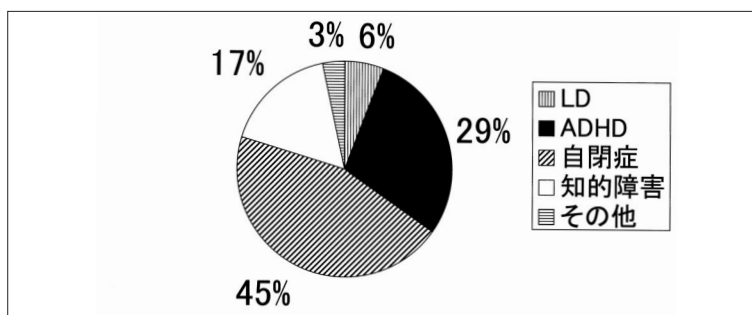


図2 診断のある対象児童118名の診断

LD 7名, ADHD34名, 自閉症53名(自閉症32名, アスペルガー障害 8名, 広汎性発達障害 6名, 高機能自閉症 5名, 自閉的傾向 2名), 知的障害20名, その他 4名(てんかん 2名, 不明 2名)で, 自閉症が5割近く, 次いでADHD, 知的障害の児童が目立った。

2. 最も気になる・困った行動について

1) 最も気になる・困った行動の内容

図3に最も気になる・困った行動1つの自由記述回答を、表1にはその定義と回答例を示した。

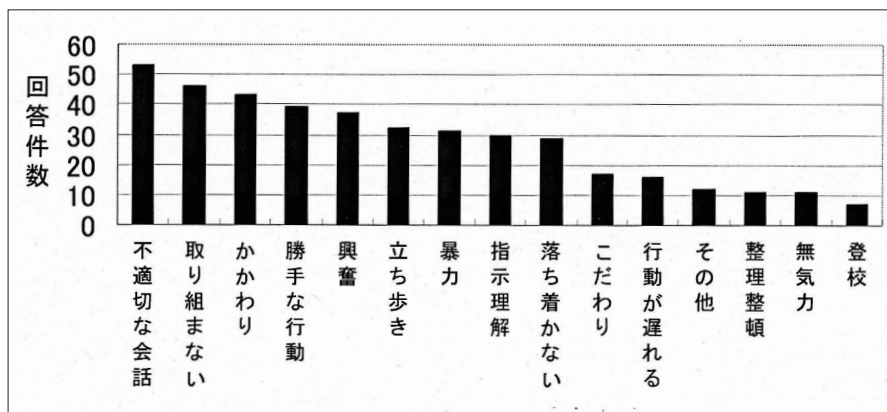


図3 対象児童414名の最も気になる・困った行動

上位から「不適切な会話」53名(13%), 「取り組まない」46名(11%), 「かかわり」43名(10%)等, 集団活動や対人関係を阻害する行動が挙げられた。

表1 対象児童の最も気になる・困った行動の自由記述回答の分類に関する定義と回答例

行動形態	定 義	回 答 例
不適切な会話	・内容や頻度が場面や状況に合わない会話, 発言に関する問題	・大きな声で独り言を言う ・自分が言いたいことを状況に関係なく話す ・ゲームや漫画の主人公になりきって話す
取り組まない	・授業や活動の取り組みやその偏りに関する問題	・興味, 関心のないことには取り組まない ・授業中, ずっと他のことをしている ・面倒なことや嫌なことはやろうとしない
かかわり	・人とのかかわりやコミュニケーション及び言語理解や表現に関する問題	・仲間との活動でトラブルが多い ・相手の気持ちが理解しにくい ・場の雰囲気が読めず, 一方的なかかわり
勝手な行動	・内容や頻度が場面や状況に合わず, 周囲が困る行動に関する問題	・わざと目立つ行動をする ・規則を守らず, 自分勝手な行動をする ・自分の思いどおりにならないとわがまま
興奮	・興奮しやすい, 大声, かんしゃく, パニック等に関する問題	・気に入らないと大声で泣きわめく ・要求が通らないとパニックを起こす ・思いどおりにならないとかんしゃく
立ち歩き	・席につかない, 立ち歩く, 飛び出す等に関する問題	・着席せず, 机の下にもぐる ・授業中に教室を飛び出す ・突然, 席を離れ, 他のことをする
暴力	・人への暴力, 物にあたる, 物を壊す等に関する問題	・突然, 友達を殴ったり, 蹴ったりする ・いらいらすると机を叩いたり, 壁を蹴る ・思いどおりにならないと手足がでる
指示理解	・指示や説明の理解に関する問題	・個別に言わないと集団指示では動けない ・自分の世界に閉じこもり, 指示が聞けない ・指示や説明の内容を取り違えることが多い
落ち着かない	・注意集中, 多動性, 衝動性に関する問題	・気が散りやすく, 集中できない ・落ち着いてじっとしてられない ・瞬間の思いで行動してしまう
こだわり	・こだわりやそれから派生する活動の切り替え等に関する問題	・給食の白衣を着ることができない ・あることに気をとられると切り替えられない ・行動の一つ一つを確認してからしか動けない
行動が遅れる	・活動に要する時間, 時間に間に合わせる, 周りに合わせる等に関する問題	・何をするにも時間がかかる ・時間内に作業ができず大幅に遅れる ・他の友達に合わせたペースで活動できない
整理整頓	・活動の準備, 片づけや整理整頓, 忘れ物に関する問題	・身の回りの整理整頓ができず持ち物が散乱 ・忘れ物が多い
無気力	・学習や活動の意欲に関する問題	・気分がのらないと返事もできない ・やる気がなく, 投げやりな態度をとる
登校	・通学上の問題や遅刻, 登校しぶりに関する問題	・左右を見ずに道路を飛び出す ・朝になると不安定な気持ちになる

2) 学年からみた最も気になる・困った行動

図4に、学年からみた対象児童の最も気になる・困った行動について示した。

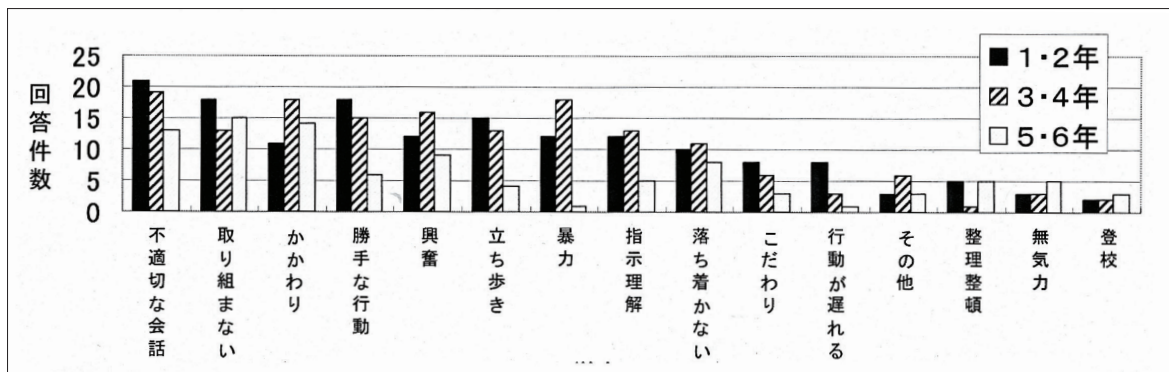


図4 対象児童414名の学年からみた最も気になる・困った行動

最も気になる・困った行動と学年でクロス集計した回答の偏りに有意差がみられた（尤度比 $G(2)=51.149$ $df=28$ $p<.01$ ）。1・2年生では「行動が遅れる」が多く、「暴力」が少なかった。3・4年生では「整理整頓」が少なく、「暴力」が多かった。5・6年生では「暴力」が少なく、「整理整頓」と「無気力」が多い傾向にあった。また、統計的な有意差はないが、「登校」の問題では5・6年生が多かった。

3) 診断からみた最も気になる・困った行動

図5に、診断からみた対象児童の最も気になる・困った行動について示した。

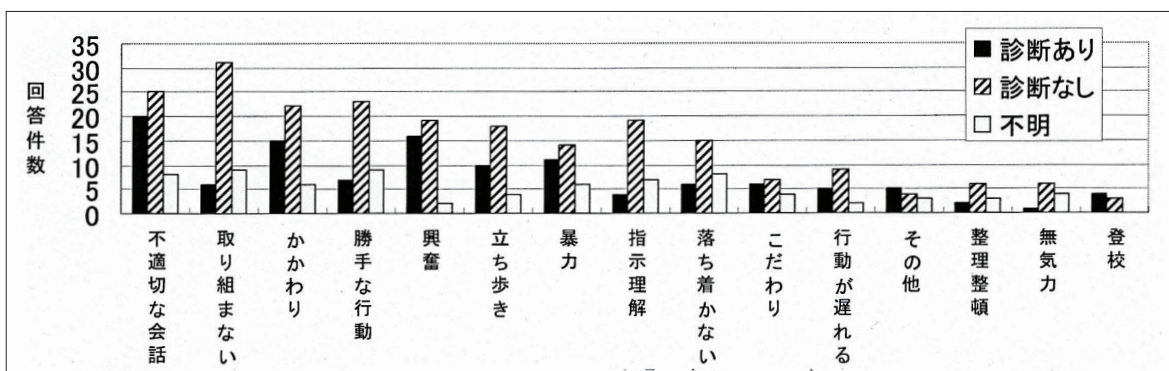


図5 対象児童414名の診断からみた最も気になる・困った行動

上位5つの行動と診断のクロス集計した回答に偏りに有意差があり（ $\chi^2=16.644$, $df=8$, $p<.05$ ）, 「診断のある児童」は「取り組まない」が少なく、「興奮」が多かった。

VI. おわりに

G市の696名の小学校通常学級担任への質問紙調査から、軽度発達障害が想定され気になる・困った行動を示す414名の対象児童が抽出された。主要な結果として、次の3点が挙げられる。1) 最も気になる・困った行動として、上位から「不適切な会話」, 「取り組まない」, 「かかわり」, 「勝手な行動」, 「興奮」等が挙げられた。2) 学年からみると、低学年では「行動の遅れ」が、中学年では「暴力」が、高学年では「無気力」が目立った。3) 診断からみると、上位5つの行動に関して、診断のある児童は「取り組まない」が少なく、「興奮」が多かった。

上位の内容から、集団ベースで活動することの多い通常学級においては、担任教師は集団活動や対

人関係を阻害する行動を問題としていることがうかがえる。それも、立ち歩き等の授業逸脱や暴力等の危険な行動よりも、「不適切な会話」が第一位に挙げられたことには、その頻度も関係すると考えられるが、場面や状況にそぐわない会話や発言が担任教師を悩ませるといった特徴的な様相を呈している。また、第二位に「取り組まない」が挙げられたことには、特別支援教育に関する情報の普及により、彼らの参加を重視するものの、期待どおりにならない、また集団指導の中でうまく対応できないことが関係しているのではないだろうか。問題行動の出現に、他者に対するコミュニケーションが伝わらない、伝達性の問題が関係していることが示唆されている知的障害養護学校における調査結果(小笠原・守屋, 2005)とは異なる様相を呈している。

学年からみると、3年生が多いことには、教科や活動内容が複雑化する時期との関連も推測される。低学年では集団行動の育成が重視され、集団のペースで行動できない「行動の遅れ」が問題とされ、中学年では対人関係で生じる「暴力」が問題とされる等、各学年で生じやすい行動の特徴がみられた。一方、高学年では人数は減るが、「無気力」や「登校」は多い傾向にあった。この結果は、高学年では行動面の問題が沈静化する可能性とともに、二次的な問題に発展している可能性も示唆している。

診断からみると、診断の有無で回答に偏りがみられた。診断のある児童では、集団活動や対人関係においてなんらかの配慮や手立てが講じられている可能性がある。そうした視点から本結果をみると、担任教師にとって比較的配慮が行いやす「取り組み」においては問題を回避しやすい一方で、相手やその場の条件に左右される対人関係において問題が生じやすいことが考えられる。今後、これらの行動の生起と支援内容や活動場面の環境特徴について検討する必要がある。

付記

本研究は、平成17年度科学研究費補助金(基盤研究C)「通常学級に在籍する軽度発達障害児の気になる・困った行動の生起場面に関する調査研究」(課題番号17530689)を得て行われた。

謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、調査にご協力をいただきましたG市立小学校様、市教育委員会教育長安藤征治先生、同学校指導室副査の黒岩雅樹先生に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 平澤紀子・藤原義博・山根正夫(2005) 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究—障害群からみた該当児の実態と保育者の対応および受けている支援から—。発達障害研究, 26 (4), 256-267.
- 2) 平澤紀子・神野幸雄・池谷尚剛(2006) 小学校通常学級に在籍する軽度発達障害児への成果活用型・支援環境構築に関する検討。岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 54 (2), 147-157.
- 3) 小笠原恵・守屋光輝(2005) 知的障害児の問題行動に関する調査研究—知的障害養護学校への質問紙調査を通じて—。発達障害研究, 27 (2), 137-146.
- 4) 篠原弘章(2001) 行動科学のBASIC, 18-29. ナカニシヤ出版.
- 5) 関戸英紀(2004) 通常学級に在籍する特別な教育的ニーズのある児童に対する支援—有効な支援を行うための要件の検討—。特殊教育学研究, 42 (1), 35-45.
- 6) 竹林和子・別府哲・宮本正一(2004) 教師は軽度発達障害児の問題行動をどのようにとらえているのか—軽度発達障害についての理解と意識に関する質問紙調査—。岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 53 (1), 239-248.
- 7) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議(2003) 今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)